

「この空気をありがとう」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 早や1学期が終わるのですね…

過日のことです。私は午後から出張が入っていたため、昼過ぎに校門を出て地獄坂を下りようとする、いつの間にか外は雨でした。別々の仲間からそれぞれ贈っていただいた折り畳み傘と、それをしまうための傘袋が気に入っている私は、突然の雨には常に準備万端です。傘をひろげ、坂を一步步下りていきました。

「神戸高校前」のバス停に辿り着くと生徒がひとり、雨に濡れながらバスを待っています。ちょうど期末考査中で午後から帰るところだったのですね。近づいた私が傘を差しかけて「一緒に入る？」と訊ねると、「ありがとうございます」と笑顔の返事。ふたりでひとつの傘に入りながら、話を聴いていました。試験を終えて吹奏楽部の自主練習をしていたこと、それでも練習を終えて帰ろうとしたら雨が降り出したけれど、傘を持っていなかったこと。「日々、楽しい？」と訊ねると、「毎日がとても楽しいです」と返してくれます。

やがてバス停に近づいてきた女子生徒が私たちを見て笑いかけます。私は言い訳をしました。「いや、雨の中ひとりで濡れながらバスを待っていたから、一緒に入ってもらっただけで…」と。でも、余計に女子生徒は頬を緩めます。「いや、確かにこんな年齢の離れた男ふたりがひとつの傘に入っていたら可笑しいかもしれないけどな」と私は言葉を重ねました。そうです。私とひとつの傘に入っていた相手は男子生徒だったのです。

「いや、校長先生」と女子生徒は語りだしました。「愛は年齢差も性別も越えるものだから、それはいいんです。そうじゃなくて、校長先生が生徒と相合傘をしている光景なんて初めて見たから可笑しくて…」とのこと。ああ、面白みはそこですか。僕らはようやく合点がいって、お互いの顔を見合わせて笑いました。

神戸高校に勤め始めてから、早や1年と3月。当初といちばん変わったのは生徒の皆さんとの距離感ですね。開けっ放しにした校長室の扉から生徒の皆さんが顔を覗かせ、「話がしたいんですけど…」と来られると、昨年度までは勉学の話とか部活動の話、校則の話など深刻な話が多かったのですが、最近は「ただ話がしたいので来ました」と言って笑いながら入室する生徒もいてくれて、それはそれで楽しいものです。

また先日は、男女のバレーボール部の主将・副主将が揃って訪れ、「体育館に空調をつけていただき、ありがとうございました」とお礼を伝えてくれました。昨年度に要望をいただき、私も実際に夏休みの体育館を味わって必要性を感じ、各所に働きかけはしましたが別に私ひとりの力で実現したわけではないですけどね。

4人は溢れんばかりの笑顔。その笑顔に、生徒のレシーブ練習のために汗だくになりながら、ひたすらボールを打ち続けていた中山拓也先生の姿や生徒に語り掛ける笹山先生の姿、そしてその思いに応えようとボールを無心に追うバレーボール部員の姿を思い起こしました。加えてもうひとつ。私自身の古い記憶も。

昔々、22歳で赴任した初任校にて私が任せてもらった部活動が、実は男子バレーボール部だったのです。

野球、陸上競技、サッカー。スポーツと言えばアウトドアしか経験のない私にとって、風の吹き抜けない夏の体育館の暑さは衝撃的でした。それは私の教師としての原点でもあります。その時のバレーへの思いを後に記した通信が残っています。まだ20代だった私が、初任者の頃を振り返って書いた通信からの抜粋です。

悔しいから、僕は部活のあと、クラブチームで練習をすることにした。自分がうまくなれば、もっと強くなるだろう、そう思った。バレー漬けという日々だった。そして春、2部に上がった。夏休みには僕も暇だったから、ずっと「一日練習」をした。拾えるチームを作ったら、なんとかかなと思ったから、ひたすら打ちまくってレシーブ練習をさせた。右肩が肉離れして、何度も内出血した。それでも打ち続けた。なんか情念の世界だ。

だからバレーボールをすると、今も教師になったばかりの頃を思い出す。髪の毛の茶けた子たちを集めて、トスからレシーブからひとつひとつ教えていた頃を思い出す。ぼこぼこ打ちまくるエースなんて要らなかった。ぎりぎりのボールに飛び込むことができる、そんな奴が6人集まればいい。それがバレーの魅力。だからどんなメンバーでも一生懸命にやっていたら、とりあえずそこそこの集団になれる。なんか「クラス」と似ていない？

相手チームとスペースを共有しないバレーボールは、誰か1人の醸し出すムードが周囲に伝染し、コート全体がその色に染まります。そして、相手とまじりあわないが故に、その空気はしばらくコートに留まります。良くも悪くも。簡単に言えばエースアタッカーがボールをラインの外に打ち出したとして、そのことをトスを上げたセッターのトスのせいにして口を尖らせるか、自分から手をあげて「ごめん、ごめん。次は決めるで」と笑顔でセッターに話しかけられるかが次のプレイに大きく影響するのですね。

あれは私自身にとっては、それから後に様々なチームで仕事をしていく際に生き続けることとなった学びです。「失敗を誰かのせいにしない」、加えて「手柄として人から称えられるものは自分だけのものとしない」。とても難しいことではありますが、そんな自分でありたいなとずっと思っています。だって、そうでしょ。私ひとりの力でこんなに早く体育館に空調がつくはずはないのですから。あらためてそのことを私に思い出させてくれたのはバレーボール部の4人ですね。表も裏もない、まっすぐな笑顔をありがとうございました。

表も裏もない笑顔と言え、土地柄もあるのでしょうか。前任校では校訓が「明朗親和」という気さくなものだということもあり、校長室に入り浸ってくれる生徒が数人いました。1年しか勤めていなかった私ですが彼らには存分に笑わせてもらいましたっけ。そのことを当時、私はこんなふうに通信に書いていました。

○ ある朝、驚いたこと

ある朝、出勤して、いつものように校長室の扉をひらいたとき、通りかかった生徒が訊ねてくれました。「校長先生。これ、なんですか？」

4月以来、校長室の扉に1週間の自分のスケジュールを記したプレートをかけていましたが、さらに1枚新たなものが設置されていたのです。すべて写真のなかの私が何かメッセージを伝えようとしています。全部で4枚。

『1日いません』『今はいません』『大事なお仕事中』そして『生徒OK』。誰が作成したのかはすぐにピンとききました。台湾研修に一緒に行った1年生の生徒たちですね。「先生向けのスケジュール表だけでなく、私達向けのも欲しいんです」と言っていましたから。

思えば当初は扉を全開にしていました。すると有り難いことに、顔を覗かせて挨拶してくれる生徒が少なからずいましたし、校長室に入ってきて話をしてくれる生徒もいました。

そこから夏と秋が過ぎ、さすがに冬の廊下からの空気があまりに冷たいので、最近は扉をほぼ閉めています。「それだと、いつ校長室に遊びにいいいか解らなくて困ってるんです」とのこと。この実力行使について、とりあえず認めることにしました。写真入りは気恥ずかしく、遊ばれている気もしますが、そんなに嫌ではなかったのです。



前任校でも、そしてここ神戸高校でも生徒の皆さんだけでなく、先生方もよく校長室を訪れ、いろいろなことを話してくれます。かねてから『校長は孤独な仕事』と校長先生をされたことのある先輩方からお聴きしていましたが、私に関して言えばそうではなかったですね。心からありがたいことだと思っています。

あと1週間で夏休みですね。水泳部の菱川瑛吾さんと廣田七海さんが出場する近畿高等学校水泳選手権大会のタイムテーブルと、自身の出張日程を見比べて何処か応援できる隙間がないか考えます。どれだけ皆さんの夏休みに立ち会えるか、それは私にとっては大きな夏休みの宿題なのです。頑張りどころなのです。

ともあれ金曜日の終業式。このたびも「誰ひとり生命を落とすことなく、ここに集まってくれて有り難う」と伝えることができそうで、そのことはとても嬉しく思っています。本当にありがとう。

